

ラテンアメリカと子どもの本

平成 21 年 4 月 25 日

講師：神戸 万知

皆さんはじめまして。神戸と申します。よろしくお願ひいたします。着席してお話をさせていただきます。今日はあいにくのお天気の中、足を運んでいただき、どうもありがとうございます。先ほど紹介にありましたとおり、私は国際子ども図書館で 2007 年にラテンアメリカのスペイン語圏の図書の購入リストというのを作成するお仕事をさせていただき、今回ラテンアメリカと子どもの本について、お話しさせていただくことになりました。実はこの「ゆめいろのパレット」展でも御縁がありまして、先ほど私の訳書の作品を紹介していただいたのですが、野間国際絵本原画コンクールが今回 16 回目なのですが、その中で準グランプリを含めて何度も受賞されているピエト・フロブラーさんの『おい、カエルくん！』（ピエト・フロブラーさく、ごうどまち訳、オリコン・エンタテインメント、2004 年）という作品を 2004 年に翻訳出版したのですね。この本を見つけたきっかけというのが実はユネスコのこの野間コンクールでした。その当時、世界の絵本を出そうという企画を依頼されまして、アメリカとイギリスとスペインは比較的簡単に決まったのですけれども、世界ということで、ほかの国はないかと探していろいろ当たってみたときにちょうど「ゆめいろのパレット」展をやっている、いろいろ見せていただいて、これは、と思う作家の中で既に出版されている本がないかなということで調べたら『おい、カエルくん！』がありました。取り寄せてみたらとてもよい作品なので、どうですか、というふうに提案をしたらすぐ通って出版する運びになりました。ですからこのような形で「ゆめいろのパレット」展に関われることを大変光栄に思っています。では、ラテンアメリカの話に移りたいと思います。

ラテンアメリカとは

ラテンアメリカといいますが、今日いらっしゃる方は興味を持っていらっしゃるかもしれませんが、一般的な日本人にとっては地理的にも一番遠いぐらいの場所ですし、気持ち的にも世界で一番遠い所と言っても過言ではないぐらい知らないのですね。例えば、例を挙げますと、私は翻訳学校で翻訳を教えることもありますが、ドミニカ共和国を舞台にした作品を課題に出したときに、訳文に平気で南アメリカのドミニカとか書いてきたりするのですね。言ってみると、アジア大陸の日本と書いているようなもので、私はドミニカがすごく好きなので、結構ガックリしちゃったりしたのですけれども、それぐらい逆に考えると日本人は知らないのだなあというのを改めて思ったりしました。

ではなぜそもそも私がラテンアメリカに興味を持ったかといいますが、もともと英語以外の外国語を勉強したいと思っていて、それは別にフランス語でもドイツ語でもよかったわけなのですが、スペイン語とかフランス語を話している国を数えて、一番多かったのが

スペイン語だったので、ああ、これは得だとか、そういう安直な考えでスペイン語やってみようかなって思ったのがきっかけでした。その後アメリカのオレゴン州に高校生のときに交換留学をしました。オレゴン州は余り知られていないかもしれませんが、メキシコ系のアメリカ人が割合と多い所です。当時はメキシコ系アメリカ人という存在も知らなかったのですが、メキシカン、メキシカンと言われていて、きっと外国人のメキシコ人なのだろう、彼らは英語が上手でうらやましいなあなんてばかなことを考えて、後でメキシコ系アメリカ人というのを知ったのですけれども、それで親近感を覚えました。あと、その後にニューヨーク州の大学に進学して、スペイン語を専攻しました。日本でスペイン語というと、まず、思い浮かべられるのは、ヨーロッパのスペインなのですが、アメリカではやはり地理的に近い地域ですので、ラテンアメリカの方がずっと近いのですね。ですから私が習った先生も、最初はメキシコが専攻のアメリカ人で、次がメキシコの人とかアルゼンチンの人とかニカラグアの人とかで、スペインの先生は一人だけでした。

メキシコ専門の先生からメキシコとメキシコ系の人たちのことを学んだり、アメリカ文学の授業でいろいろな移民のお話を讀んだりして、そういうところに、自分もアメリカではマイノリティでしたから、すごく共感を覚えました。白百合の大学院で児童文学を専攻し、ほかの人がやっているテーマよりも自分ならではのテーマがないかなと探したときにメキシコ系のことを思い出して、昔讀んだ作品を手がかりにいろいろ探してギャリー・ソト (Gary Soto) という作家を見付け、それで作品を讀んでみて、とてもよかったので、修士論文に書きました。幸いなことに、その修士論文で取り上げたソトという作家の『四月の野球』(ギャリー・ソト作、神戸万知訳、理論社、1999年) という代表作を後に翻訳で出版できることになりました。それからヒスパニック作家に興味を広がって、ドミニカ系のフーリア・アルバレス (Julia Alvarez) の『ロラおばちゃんがやってきた』(フーリア・アルバレス作、神戸万知訳、講談社、2004年) という作品を翻訳したりしました。ヒスパニックについてはまた後ほど触れたいと思います。

ラテンアメリカといいますと、では、具体的にどこでしょうということ、適宜皆さんにお配りした地図を見ながら話を進めていきたいと思います。案外日本人は知らないのですけれども、地理的な分類だと、ラテンアメリカは文化的な分類で、地理的だとメキシコは北アメリカになるのですね。その下にグアテマラがあって、エルサルバドルがあって、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマがあります。そこからカリブ海に移ると、アメリカのフロリダの下にキューバがあって、ハイチの右側がドミニカ共和国、あと、国ではないのですが、アメリカの準州でプエルトリコがあります。南米に移りまして、パナマの右ぐらいいから、コロンビアがあって、その右にベネズエラがあって、コロンビアの下にエクアドルがあって、その下にペルーがあって、ボリビアがまたあって、パラグアイがあって、ウルグアイが右の方にあって、アルゼンチン、チリとなっています。合計 17 国プラス、プエルトリコがスペイン語圏のラテンアメリカになります。

これから各国を少しずつ紹介していきたいと思います。その際に御参考までに識字率と

人種構成も述べていきたいと思います。識字率は15歳以上の住民の読み書きができる割合ですね。これはCIA（Central Intelligence Agency；アメリカ中央情報局）のホームページから見えています。大体2008年とかではなくて、2002年とかぐらいのデータですが、参考までに日本とどれぐらい違うかということ、日本は99.8%ということでした。人種構成に関しても、一言でラテンアメリカと言いましても、例えば白人が多い地域と、メスティーソといわれる、白人とインディオ（先住民）の混血が多い地域と、先住民が多い地域と、あとアフリカ系の人が多い地域と、いろいろなですね。だから、それが違うということだけでも、ラテンアメリカの多様性が分かるかなということ、決して人種構成がこうだから、ということ、差別意識があるからという意味ではないことをお断りしておきます。

レジュメに一応皆さんの聞き慣れない言葉としてメスティーソとムラートを書いておきました。メスティーソというのは、先住民、スペイン語だとインディオなのですけども、英語だとインディアンですね。今はインディアンというのは差別語でネイティブアメリカンと言わなければいけないのですけれども、スペイン語ではネイティブアメリカンという言い方はしないで恐らくインディオのままなのかなと思います。先住民とスペイン系白人の混血ですね。ムラートが黒人とスペイン系白人の混血です。混血というのも決して悪い意味ではなくて、いろいろな国でそれが彼らのアイデンティティとなっていたりするので、ちょっと日本人と感覚が違うかなあとと思います。またラテンアメリカのメスティーソとか白人とかそういう分け方もあくまで見た目での判断であったり自己申告だったりするので、おおよその目安とを考えてください。アメリカだと何%、おじいさんと、おじいさんのおじいさんがとか厳密にどこまでがアフリカ系だ、とかという法律があるのですが、ラテンアメリカだと見た目なのですね。だから、兄弟で色が浅黒い子と白い子だと白い子の方が優遇されるとか、そういうアメリカとは違う人種差別みたいなものが実際には存在しています。ちなみにラテンアメリカで混血が進んだ理由というのは、イギリスの清教徒たちは大体家族そろってアメリカに移住したのですが、スペインから中南米へ入植した人たちというのは約8割が男性で、そのために先住民とか黒人の奴隷とかの女性との間に子どもをもうけることが少なくなかったから、そのため混血がラテンアメリカでは進んだ、とされています。

人種構成が様々ということを行いましたけれども、では共通点は何かということ、スペイン語になると思います。スペイン語が公用語あるいは主な使用言語です。もちろん、ハイチはフランス語であったりブラジルはポルトガル語であったり、違う国の植民地だった所もありますけれども、今回スペイン語圏のラテンアメリカの共通点というのは、まずスペイン語ですね、当然ですが。ただまあ、北のメキシコから南のチリまで様々で、知れば知るほどやはりスペイン語という言葉だけでくくるには、ちょっと難しいかなというのは思います。一般的に日本だったら、自分たちが属するアジアというのは、国ごとの違いはイメージできるでしょうし、ヨーロッパでもイギリスとかフランスとかスウェーデンとかもある程度あると思うのです。アメリカなんかだったらニューヨーク、ロサンゼルスと、市、

都市ごとの違いというものも皆さんイメージがわくかもしれません。ですから、いかにラテンアメリカが日本にとって遠い国なのかということも一くくりにしてしまうということが大きな象徴になっていると思います。私自身もラテンアメリカの話をしに来ているのですが、ラテンアメリカ諸国 17 か国プラス、プエルトリコがあって、全部に精通しているわけでは決してありません。もともとはメキシコ系のアメリカ人や、ドミニカ系のアメリカ人とかヒスパニックの作品が一番の専門なのですけれども、それにつながって興味があるのがメキシコとかカリブ海とかコスタリカ、そういったラテンアメリカのどちらかといえば北側に私は興味があります。皆さんが例えば「ボリビアの話とか聞いたかったのに」と期待なさっても余り話さないかもしれません。全部の国をまんべんなくというのはちょっと今回は難しいかもしれないので、それは最初にお断りしておきます。では、北から一つ一つの国をちょっとずつですが、お話ししていきましょう。

メキシコ

一番北がメキシコです。先ほども言いましたとおり地理的には北アメリカです。ナフタ（【NAFTA】 North American Free Trade Agreement ; 北米自由貿易協定）、御存じでしょうか。北米自由貿易協定というのは、アメリカ、カナダ、メキシコの 3 か国が加盟国です。だから中南米という言葉は私にはとても抵抗がありまして、メキシコが外されてしまうという気がいつもするのです。ですから今回の講演タイトルも中南米ではなくてラテンアメリカにしてください、とお願いしました。地図を見ていただければ分かる通り、メキシコはアメリカと地続きです。ですから、ほかの国よりもアメリカとの関係が強いです。というよりも 1846 年から 1848 年の間に起こったアメリカ・メキシコ戦争というのがあったのです。そこでメキシコは負けて現在のテキサス州、カリフォルニア州、アリゾナ州、ユタ州、ニューメキシコ州等を取られてしまっていて自分たちの領土をかなり無くしたのです。ですからカリフォルニア南部ではロサンゼルス（スペイン語で訳すと天使たち）とかサンフランシスコ（聖フランシスコ）のように、スペイン語名の地名が多いのです。メキシコの人たちが合法的に入って移民した人もいれば、国境を破って非合法に入った人もいます。そういう人たちも多いのですが、自分たちは全然動かないのに勝手に領土がメキシコになり、勝手に領土がテキサスとして独立して、また勝手に領土がアメリカに移ってしまっていて、そういう先住民と呼んでもよいようなメキシコ系の人たちもいます。そういう人たちはもともとスペイン語を話していますので、ずっとスペイン語を話している人も多いようです。子孫になると教育が英語になりますから違うでしょうけれど、本当に自分は何一つ移動してない、どこも移動していないのに国境だけが動いてしまったという人も中にはいるのです。

余り御存じない方も多いのですが、メキシコの人種構成はメスティーソと呼ばれる白人とインディオの混血の人が一番多いとされていて、過半数を超えていて、約 60%です。識字率は 91%。メキシコはラテンアメリカの中では経済的にも大きい方ですから、91%とい

うのは納得ですね。イメージとしてはマリアッチというバンドとかサボテンで作ったお酒のテキーラなどが知られています。メキシコ料理というのは東京で最近は大分増えましたので、なじみのある方も増えていますが、まだまだ一般的とは言えません。でも私の経験から言うと、アメリカの南西部というのはすごくメキシコ料理が多くて、メキシコ料理というのはお米やトウモロコシを材料に使っているので、日本人の口にとっても合いやすいのですね。だから留学生が帰ってきてメキシコ料理がすごく好物になっているということはとても多いです。

あと、メキシコだけではないのですが、ラテンアメリカ全体で、もともとスペインの植民地でしたから、カトリックが広く浸透しています。ただカトリックといっても、ヨーロッパのカトリックというよりも、もう少し土着の信仰と融合したカトリックなのですね。スペインの人たちも現地の人たちをカトリックに改宗させるためにそういうようなことを使い、現地の人たちもそういうことに土着の信仰とうまく融合させることによってカトリックを受け入れてきたということになります。ちょっと驚かれるかもしれないのですが、ラテンアメリカには肌が褐色のマリア様とかもいるのです。一番よく知られているのは、カトリックの教会から聖母出現譚（奇跡によってここでマリア様が出たというような、世界各地にある話）に公認されているお話の一つで、メキシコのグアダルルーペの聖母という話です。このグアダルルーペの聖母というのは肌が褐色と言われています。メキシコでは精神的な象徴としてとても親しまれている存在、マリア様です。

文学の話に移りますと、ノーベル文学賞を受賞した詩人のオクタビオ・パス（Octavio Paz）という人がいます。今日の一つ目は、このオクタビオ・パスの短編を子ども向けに翻訳した『ぼくのうちに波がきた』（オクタビオ・パス原案、キャサリン・コーワン文、マーク・ブエナー絵、中村邦生訳、岩波書店、2003年）という作品です。これは岩波書店から出ました。子ども向けに翻案したので、この話では子どもが海に行って波と仲良くなって波を連れて帰ってきちゃう。捨て犬とか捨て猫じゃなくて波を拾ってきちゃうのですね。それでだんだん波が大きくなって手に負えなくなって、さんざん困って、しまいには得体の知れない怪物とかまで呼んできちゃって、どうしようかと思っただけで逃げたときに、ちょうど冬になって波が凍っちゃってまた海に戻す、という話なのですね。もともとの話はこの波が女の人で、男の人が連れて帰ってちょっと何ていうか残酷な愛憎物語みたいな形で、最後は氷になった波がアイスピックで砕かれるみたいな怖い話なのですけれども、子ども向けの話では、後で海に戻してあげて、その男の子は、波がいなくなってほっとしたと思ったら今度は雲を見てあれは素敵だな、なんて思ったりしています。このとてもスケールの大きい想像力に、驚かされる作品でした。

中央アメリカ（グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、パナマ）

次に中米、中央アメリカに移りましょう。メキシコのすぐ南から、地理的には中央アメ

リカが始まります。

グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル

まずはグアテマラ (Guatemala)。スペイン語は基本的にローマ字読みなのでですね。ですから皆さんは「グアテマラ」と、もうこれでよいのです。「グアテマラ」簡単に言えると思うのですが、何かアメリカ人にはとても舌が絡まる名前らしくて私の同級生はグアテマラが言えなくて非常に苦労していました。こういう意味でスペイン語を習うのは日本人にとって少し有利なところもあります。メキシコと同じにマヤ文明が栄えた地域で、メスティーソが多いのですね。メスティーソが多くてマヤ文明ということで私はグアテマラとメキシコは似たような印象を持っています。ですが、グアテマラの方は 1960 年から 36 年間も内戦がずっと続いていましたので政治的にすごく不安定で、今でもちょっと貧しくて経済的にも大変という感じです。文学的にはミゲル・アンヘル・アストゥリアス (Miguel Ángel Asturias) がノーベル文学賞を受賞しています。ラテンアメリカの受賞者は結構多いのです。

次がグアテマラの東、ホンジュラスです。ここら辺にくるとなじみのない方は何だろうという感じになってくると思いますがけれども、グアテマラの南がエルサルバドルでここら辺がまだメスティーソが多くて住民の約 90%がメスティーソですね。それで、グアテマラの識字率がやはり低くて 69.1%、これを見ていただくと、やはり 36 年間内戦が続いた影響がここに現れているのが分かっていたかなあとと思います。エルサルバドルが 80%、やはりちょっと低めですね。ホンジュラスも 80%です。ですから、中央アメリカというのは、そういう意味では、子どもの本を読むというよりも、まず、読み書きができるようになる人たちを増やすというのが先決なのかなあという印象もあります。

ニカラグア

その南にニカラグアがあります。ニカラグアは識字率が 67.5%、恐らくラテンアメリカの中で一番低いのではないかなと思います。67.5 ですからね。だから今は余りこういう作品があるよ、こういう作家があるよというのが出てこないのですが、ここでは 19 世紀にスペイン語圏最大の詩人といわれたルベン・ダリオ (Ruben Dario) という人がいまして、この人が子ども向けの詩とかを書いていたりして、それが今でも非常によく読まれています。

コスタリカ

ちょっと識字率が低い国が続いて、その下がコスタリカになります。コスタリカだけはちょっとほかの中央アメリカと違う国です。ちなみに今回のコンクールのグランプリ受賞者はコスタリカの方、とさっきも紹介されていましたね。コスタリカは「豊かな海岸」という意味なのです（ほかの国名にも意味があるかもしれないのですが、私にはちょっと分かりません）。その言葉のとおり非常に自然が美しい国です。映画「ジュラシック・パーク」の舞台とされるほどの密林とかジャングルみたいなのがあったり、世界一美しい

鳥とされる、「ケツアル」という鳥がいたりしまして、これは手塚治虫の『火の鳥』のモデルになった、とされています。あと、コスタリカはほかのラテンアメリカの国と政治的にもちょっと違っていて、軍隊を持たない国とか、あとは教育がすごく熱心という国でも知られています。そういう意味で経済とか政治的にはほかの地域より安定しているのですね。あと、アメリカ人の多くが定年後に移住をしていたりするし、観光などでとても潤っているのも、そういう意味でも豊かです。周辺諸国は、最近までいろいろ政治的に不安定なのですけれども、コスタリカは政治的にも経済的にも良好な状態を保っていて、先ほど識字率が低い数字が幾つか並びましたが、コスタリカは白人が多くて 94%で、識字率もとても高く 94.9%となっています。白人が多い、と言いましたけれども今回のコンクールのグランプリの受賞者は彼女が小さいころ台湾から移住してきたそうです。コスタリカの中では、そういう台湾とかアジアの人たちはごくごく少数で 1%ぐらいだそうです。

あちらで原画を見ていただくと分かると思いますが、台湾ならではのすごく細かい貼り絵と、あとコスタリカの自然の美しい色合いを知らない者でなければ出せないような海とか大地の色というのがすごく素敵なので是非生で御覧になってみてください。コスタリカは教育が熱心で識字率も高いと先ほども言いましたけれども、余り文学者でこの人というのが私は聞き覚えがないのですね、勉強不足なのかもしれませんが。私コスタリカが好きでだれかいないかなあと思っているのも、ウェン・シュウさんの本なんか是非本として出してほしいなと思っています。

パナマ

コスタリカの南がパナマです。スペイン語の発音だと「パナマア」となります。中央アメリカはここまでですね。パナマというのはパナマ運河とか教科書で学びますから聞き覚えのある方は多いのではないのでしょうか。ここはメスティーソが人口の 60%ぐらいです。中央アメリカの中ではコスタリカと並んで経済的に進んでいますので、識字率も 91.9%と高いです。ただ文学的にこれという有名作家とかこれという作品はちょっと思い当たらないのですね。

カリブ海（キューバ、ドミニカ共和国、プエルトリコ）

次にカリブ海へ移りましょう。カリブ海というのは中央アメリカの右側です。すごくたくさん小さな島があるのですが、もとスペイン領だけでなく、フランス領とかオランダ領、イギリス領など様々です。ただ今回はスペイン語圏ということで、キューバとドミニカ共和国そしてアメリカ準州のプエルトリコを取り上げます。

キューバ

まずはキューバです。アメリカの一番右の中、フロリダ半島の下に細くとがっている先の、フロリダ海峡を挟んでアメリカの最南端、キー諸島の 145 キロ南にあって、アメリカ

大陸で初めて成立した社会主義国家です。フィデル・カストロ (Fidel Castro) とか知ってらっしゃる方も多いと思います。日本ではキューバというと野球が有名ですし、あと踊りとか音楽ですね、ルンバとかチャチャチャなどがよく知られているかなあとと思います。キューバの住民の人種構成は、ムラート (白人とアフリカ系の混血) が 3 割、ヨーロッパ系白人が大体 5 割、インディオと呼ばれる先住民ももちろんいたのですが、スペイン人が来たときにすごく過酷な扱いを受け、虐殺されたりとか労働を強いられて亡くなってしまったりとかして、あとはヨーロッパから持ち込まれた疫病などでほぼ絶滅に追いやられてしまいました。これは後から述べるドミニカも一緒なのですね。先住民が全部死んでしまった代わりに黒人奴隷をじゃんじゃん連れてきて、それで混血が進んで今ムラートが多くなっているのがキューバとドミニカ共和国です。

キューバは高度な医療技術を持っていて知的水準も高いのですね。識字率は 99.8%、日本と同じです。文学の面では 19 世紀のホセ・マルティ (Jose Marti) という国の英雄的な存在がいました。キューバ革命の前はニコラス・ギリェン (Nicolas Guillen) とかアレホ・カルペンティエール (Alejo Carpentier) など、世界的に評価の高い作家が登場しました。けれども革命後に著名な作家が反革命的とされて弾圧を受けたりして、迫害を受けて国外へ亡命してしまいました。例えば、レイナルド・アレナス (Reinaldo Arenas) がそのような亡命してしまっただけの人です。ですから、そういう意味では水準は高いのだけれどもやはりちょっと思想的には自由に何かいろいろ活動できないというのがあります。

キューバに限らず、ほかのラテンアメリカ諸国でも国の情勢が不安定になって自由な創作活動が妨げられると、国外へ脱出してしまいう作家が少なくないのです。幸いスペイン語を使える国というのはたくさんありますから、国外へ出てそれほど不自由なく創作活動を続けられますし、日本人からするとちょっとうらやましい話なのですけれども、ただその国の人たちにとっては優秀な人材が流出してしまうから、その不安定な時期に文化が停滞してしまって結果としては痛手を被ってしまうことになってしまうのですね。ですから、ラテンアメリカの購入する本のリストを作っているときにも、思った以上に本はたくさんあり、あわよくば実際に持ち込もうかなあなんて思っているのですが、水準に達していると思える本は案外少なく、なかなか見付からないのです。というのは、研究者としてはこういうのがたくさんあって、こういう傾向があるというのがそれはそれで面白いのですけれども、翻訳者としての視点で考えると、やはり紹介するからには質のよいものじゃないと持ち込めないかなあというので、それはちょっと寂しいところでした。それは戦後のある時期に大体独裁制になってしまったりとか、軍事政権がどうのとか内乱が起こったりとか、そういうことがあるからというのが大きいと思います。

ドミニカ共和国

話を戻しまして、ドミニカ共和国に移りたいと思います。ドミニカ共和国はキューバの東にあるハイチと一緒に小さな島です。エスパニョーラ島というのですが、そのエスパニ

ヨール島の左側、西側がハイチです。ハイチはフランス語圏です。ちなみにカリブ海にはドミニカ国という国もあって、こちらは英語圏で全く別の国です。ドミニカ共和国というのは、コロンブスが1492年に初めてアメリカに上陸したときに来た所だと言われています。だからヨーロッパ人が最初に定住を始めたのもスペイン人がアメリカ征服の拠点としたのもこのドミニカ共和国です。アメリカ大陸全体の中で最初に大聖堂とか大学が建設されたのもドミニカです。日本ではキューバと同じように野球が盛んな国として有名でしょうかね。メジャーリーガーもたくさんいます。人種はキューバと似ていますが、ムラートの率が少し多くて73%、白人が16%、黒人が11%、識字率は87%です。先ほども言いましたように、キューバと同じように先住民というのはスペイン人による虐待とか虐殺とかヨーロッパ人からの疫病のためにほぼ絶滅してしまいました。

私は個人的にドミニカというのがすごく好きな国なのです。メキシコと並んで2大、好きな国なのですが、なぜかという『ロラおばちゃんがやってきた』という、ドミニカ出身の作家の作品を訳して、その世界観がすごく気に入ってしまったからなのです。国際子ども図書館の依頼でラテンアメリカの児童書購入リストを作成したときも、是非ドミニカの本を見付けたいと思って頑張ってみたのですが、残念ながらあるかどうかはともかく、入手できそうなもの、リストに載せられるものは1冊も入れることができませんでした。本当に残念です。ほかにもホンジュラスとかパナマというのが見付からなくて、エルサルバドルも全然なくて、最終的にアメリカに移住してスペイン語で作品を発表しているホルヘ・アルグエタ (Jorge Arugueta) という人を捜し当てる程度にとどまりました。ラテンアメリカ、スペイン語圏の作家リストのような、研究書のようなものもあるのですが、調べると絶版になっていたりして入手不可能とかなのです。ですから入手可能なものが本当になくてとても残念ですが、今後もドミニカは探していきたいと思っています。

先ほどもちょっと言いましたけれども、スペイン語を使える国というのはラテンアメリカで17か国、加えて、アメリカでも使っている人が多いですし、スペインももちろんありますし、たくさんあるので、人々が国外へ移るケースが日本で想像する以上にあります。一番近い大国のアメリカでは、スペイン語は公用語ではないのですが、ラテンアメリカから移住する人は非常に多くて、アメリカ国内でのスペイン語の需要というのはどんどん増えていますから、作家活動も問題なく続けて、それでドミニカ出身の作家とかも英語で作品を書いています。

アメリカの話をしてしまったのでちょっと続けますけれども、アメリカの第1マイノリティは皆さんアフリカ系アメリカ人かなあとと思われるかもしれませんが、実は現在ではヒスパニックなのです。大体予測では2010年ぐらいに、ヒスパニックがアフリカ系の黒人を超えるのではないかと、というふうに言われていたのですが、2000年の調査で、人口増加が予想以上でヒスパニックが全米人口の12.6%となって、12.1%のアフリカ系を超えました。カトリックの信者なので、彼らは中絶がタブーなのです。ですから子沢山で、

アメリカの中で白人とかはそんなに増えなくても、ヒスパニックの人口はすごく増えている、という状況なので、これからもどんどん増えて影響力が増していくのではないかと思います。つい先ほど大統領選挙がありましたけれども、ヒスパニックの票をつかむのが勝敗の大きな鍵になっていると最近では言われています。

作家が自由に移動して自由に表現できる場所を求めるのはとてもよいことなのですが、研究者としては、これは実に困ることでもあるのです。というのは、だれがどこの国の人かというのが調べてもなかなか分からなくて、すごく手間取ることがあるからです。国際子ども図書館の仕事でも、作者の出身地というのが分からなくて延々と探して結局スペインだと分かって、そのときはスペインの子どもの本は対象外でしたから除外してがっかり、ということがありました。本を見ただけではプロフィールに必ずしも書いているとは限らないですし、どこどこ在住イコールどこどこ出身とも限らないですし、例えばドミニカ出身で生まれ育って移住した人は二重国籍なのかもしれませんし、出版社の国イコール作家の国ではないのですね。だから、スペイン語というつながりがあれば別にほかのスペイン語の国から出すことも全然難しくないのでですね。輸入する側としても翻訳の手間が省けますから、実際に手間暇がかからなくてお互いによいのではないかなと思いますけれども、研究者としてはいつも探して調べるのに手間取っています。

ドミニカに戻りまして、先ほどのフーリア・アルバレスのことについてちょっと触れたいと思います。現時点では翻訳が出ているのが、私が訳した『ロラおばちゃんがやってきた』という作品だけです。この作品は、アメリカのヴァーモント州（ニューヨーク州の隣なのですけれども大体東北だと思ってください。一番北でカナダの国境に近いほうです。）に住むドミニカ系アメリカ人の男の子ミゲルという子が主人公で、両親がドミニカからアメリカに移住してきたので、ミゲルは二世になります。アメリカで生まれ育ったので肌は浅黒くていわゆるドミニカ人なのですがすけれども、ドミニカには行ったことがないし、スペイン語も話せません。両親が離婚する前まではマンハッタンに住んでいて、そこではいろいろな人種がいますから、特に自分が目立つということもなかったのですがすけれども、ヴァーモントというのは白人が多い地域ですので、もう引っ越してみると、ミゲルってインディアンなの？と友達に言われたりとかして、改めて自分とはだれなのだろうというように悩みを抱えるのですね。両親が離婚してしまって母親が仕事に行くことになったので、子どもの世話をしてくれる人がいないということで、お母さんがドミニカに住むロラおばさんと呼び寄せるのです。このおばさんというのが、ドミニカというのはカリブ海の明るい太陽とか想像していただけるかなと思いますけれども、それをまさに象徴しているような人で、最初はスペイン語しか話せず、英語は一つも分からないのですがすけれども、太陽のようなとびきりの笑顔とすごくおいしい料理で次々と周りの人を巻き込んで、すごく幸せにしちゃうのです。ミゲル自身も自分が抱えていた両親の離婚とか、転校直後にいろいろな環境が変化したこととか、自分はだれなのだろうという文化的な葛藤なども、おばさんのおかげで無事乗り越えられるというハッピーエンディングな話です。よくドミニカ版メア

リー・ポピンズと称されたりもしています。メアリー・ポピンズのように飴と鞭を使い分けて怖いようなそういうことはなくて、とにかく優しい、温かい人です。

このフリーア・アルバレスという人は、独裁政権下のドミニカで子ども時代を過ごし、1960年、10歳のときにアメリカに移住しました。でも自分たちはアメリカに逃れたからよかったですけれども、ドミニカにはまだ親戚がたくさん残っているのですね。ですから自分のことではなく、その残された人の話を書こうということで書いたのが *Before We Were Free* (わたしたちが自由になる前) という作品です。これは小学校高学年から上を対象にしている作品で、12歳のアニータという女の子が一人称の語りで物語を進めていくのですけれども、アニータのお父さんやおじさんは水面下で反政府運動に加わって、秘密警察にねらわれたりして、危険なのですね。例えば、いつどこに盗聴器が隠されているか分からない、いつ何どき銃弾が飛んで来るか分からない、みたいな、緊迫感のある生活をしばらく送っているのです。大人たちは暗号を使って話さなきゃいけないとか、夜にベッドに寝るときは、普通に寝ると銃弾が飛んで来るかもしれないので、窓のすぐ下の銃弾が飛んできて当たらぬ場所に寝たりとかしています。もういよいよ、ますます状況が危なくなつてアメリカに移ろう、ということになるのですが、そのいろいろ手続きをしている間、それも危ないですからイタリア大使館の知り合いのところに頼って、1か月ほどウォークインクローゼットの中に（本当にちっちゃいのじゃなくて大き目のウォークインクローゼットの方だと思いますけれども）、そういうところで隠れて暮らした上、ついにアメリカへ逃亡します。その間に独裁者トルヒーリョ（これは実在の人物）が暗殺されたりして、民主化に向けてドミニカが大きく動くのですね。ですが、アニータのお父さんとおじさんは、最後は残念ながら殺されてしまつて、その知らせはアニータがアメリカに渡つて何日か後に届いたというような作品ですね。すごく物騒なあらすじなのですが、実際は12歳の女の子の視点で語られているしっかりとした成長小説なので、社会性を押し付けているとか、そういうことはありません。女の子が初恋したりとか初潮を迎えたりとかごく普通の視点から書かれています。ただ状況としてはそういう怖い中にあるということですね。

あと今回画像がないのですけれども、絵本で *The Secret Footprints* (秘密の足跡) というドミニカ周辺の民間伝承に登場する不思議な存在、シグアパ (Ciguapas) という存在について書いた話があります。このシグアパというのは、生き物というか妖精というか妖怪のような存在で、恐らく皆さん御存じないでしょう。私が調べた限り、日本で出版されている『世界の妖精・妖怪事典』（キャロル・ローズ著、松村一男監訳、原書房、2003年）でも見付からず、英語のものでも、今のところ再話もなく、私が読んだ限りではこのアルバレスの再話くらいしかないのですね。どういう存在かという、簡単にいうと人魚のように海に住んでいて人間にそっくりの姿をしているのですが、ただ足だけがこうやって前後が逆になっているのですね。何でこれが違うのかというと、歩くと進行方向と逆向きに足跡が地面に付くから、そうすると見付からない、人間に見付かることがないということで、便宜上そのような体型になったということです。非常に美しい生き物だということです。

ストーリーは民間伝承を基にしています。好奇心の強いシグアパの女の子が人間のところに行ってみ付かってしまって、でも人間が親切にしてくれて最後はなんとか逃げて帰って、今度は気をつけなさいよ、で、人間も案外よい人もいるじゃない、というお話ですね。アルバレスの後書きによると、このシグアパというのはスペインの入植者から逃げた先住民族ではないかという説もあるそうなのですね。

ちなみにアルバレスはこういう作品を英語で書いています。10歳までドミニカにいましたから恐らくスペイン語が母国語でその後英語を獲得したのだらうと思うのですが、現在の彼女が、自分の第一言語がスペイン語と捉えているのか英語と捉えているのかそこはちょっと私には分かりません。ただ事実として彼女は英語で作品を書いて、スペイン語版もほとんどの作品が出ているのですけれどもそれは全部翻訳者に任せています。国籍がドミニカ人なのかアメリカ人なのか、はたまた両国、二重国籍を持てているのか、それもちょっと私は分かりませんがアメリカにいて英語でドミニカの物語を紡ぐことによって、より多くの読者を獲得してドミニカについてすごく広めていることは確かなのですね。ドミニカ系の作家の第一人者で、もともとはこの *Before We Were Free* とかを書く前には大人向けのフィクションでベストセラーを出し、その後に子ども向けの本も書き始めました。

彼女の後にはジュノ・ディアズ (Junot Diaz) というドミニカ出身の作家が登場していて、この人は2008年、ドミニカ系の作家として初めてフィクションの部門でピューリッツァー賞を受賞しました。このレジュメにはディアズ (Diaz) となっていますが、通常スペイン語読みですとディアズにならずにディアスとなり、スが濁りません。訳者が彼に確認してわざと英語読みにしたのかもしれませんが。アルバレスにしてもファーストネームが英語読みだとジュリア (Julia) になってスペイン語読みだとフリーアになるのですね。私も実際疑問に思って問い合わせをしたときに、アルバレスのエージェントが、どちらでも呼ばれているけれども本人はフリーアの方が好きみたいだよ、と言ったので、フリーアを採用しました。例えばアルファベットの V、Victory の V、あれも英語の最近の英語読みではヴァーモント (Vermont) というように「ウ」に点という表記が主流になってきましたけれども、スペイン語では ABC の B と Victory の V は、発音がどちらもバビブベボなのですね。ですから、アルバレスもバビブベボになっています。名前の表記というのはいつもやっかいで、移民の文学になると英語読みをするのかその人の国の言葉にするのかというのはその都度本人に確認しないと分からないのですね。レジュメにあるメキシコ系のヴィクター・マルティネス (Victor Martinez) もヴィクターというのはスペイン語読みをするとビクトールになるのですけれども、これも訳者のさくまさんに伺ったところ、マルティネス本人に質問してヴィクターと指定されたそうです。

プエルトリコ

カリブ海でもう一つスペイン語圏に触れたいと思います。アメリカ合衆国の準州のプエルトリコです。プエルトリコというのは「豊かな港」という意味です。準州というのは皆

さんよく御存じのグアムと同じ扱いです。彼らはアメリカのパスポートを持つアメリカ国民なのですが、オリンピックではプエルトリコとして出場していますし、記憶に新しいワールド・ベースボール・クラシックでもプエルトリコとしてアメリカとは別枠で出場していました。プエルトリコでは一応アメリカですから英語が公用語なのですが、昔はスペインの支配下にあったので、実際はスペイン語が使われているようです。文化としてもヒスパニックに分類されます。プエルトリコの人たちはミュージカルとかで有名な『ウエスト・サイド物語』に登場していたりして、ほかのヒスパニックより比較的早い時期から描かれていました。子どもの本の書き手でもニコラサ・モア (Nicholasa Mohr) というプエルトリコ系の作家が 1970 年代から作品を大きな出版社から発表していました。メキシコ系の作家が子ども向けの本を大きな出版社から出し始めるのが 1990 年代なのですね、だから、20 年くらいも早くから出しています。ただ最近ではメキシコ系の方が、数がワーッと増えているような印象があります。では南米に移る前に 10 分くらいお休みにいたしましょう。

南米 (コロンビア、ベネズエラ、エクアドル、ペルー、ボリビア、パラグアイ、ウルグアイ、アルゼンチン)

(後半) はい、では始めたいと思います。先ほどカリブ海が終わりましたので南米に移りましょう。

コロンビア

まずは、コロンビアですね。南米の一番西北、北西端にあります。人種構成が、メスティーソが 58%、白人が 20%、ムラートが 14%となっています。識字率は 92.7%です。コロンビアと聞くと、まず何といてもノーベル文学賞作家のガブリエル・ガルシア＝マルケス (Gabriel García Márquez) が思い浮かびます。世界的ブームになったラテンアメリカの魔術的リアリズムの書き手として有名で、『百年の孤独』とか『コレラの時代の愛』などの作品を数多く発表しています。実はガルシア＝マルケスの短編というのは、絵本の形で改めて絵を付けて出版されたりしているのですね。日本でいうと例えば芥川龍之介の『蜘蛛の糸』や『杜子春』などが子ども向けに読まれるようになったような感覚かなあ、と私は思っているのですね。これは購入リストに入れてありますので、いつかこちらでも所蔵していただけるとうれしいな、実際に私も見てみたいな、と思っています。

ベネズエラ

次がベネズエラです。ベネズエラはコロンビアの東にあります。南米の一番北のところですね。こちらの人種構成はメスティーソが 67%、白人が 21%、識字率は 93%です。最近では 2007 年に社会主義に移行したり大統領の再選制限が撤廃されたりしたので、いつまでも、終身大統領でいられるのですね。ですから、そういう形で政治的に大きな変化があ

って独裁色が強まって、ちょっと心配なエリアです。

エクアドル

その次にエクアドル、コロンビアの南西ですね。エクアドルというのは「赤道」という意味でその名のとおり赤道の上に国土があります。人種は、メスティーソが 67%、インディオが 22%で、識字率が 91%です。やはりインディオが多いですから、インディオを描いた作品でホルヘ・イカサ (Jorge Icaza,) の『ワシプンゴ』(ホルヘ・イカサ著、伊藤武好訳、朝日新聞社、1974 年) という作品が有名でよく読まれています。この国も現在武器とか麻薬とかの密輸が増えていたり武装勢力が衝突していたりとかで、かなり危険な地域ですね。外務省の海外安全ホームページというのがあります、危険度が大丈夫から退避勧告まであるのですけれども、下から 2 番目の「渡航の延期をお勧めします」という大変危険な地域とされています。

ちなみにこの退避勧告とか問題なしとか、そういうところでいいますと、昨日ぐらいに外務省のホームページを調べたところでは、問題がないのがウルグアイ、キューバ、チリ、ドミニカ共和国。「十分注意してください」、行く分には大丈夫な国だと思うのですけれども、いろいろ窃盗団とかいますから気を付けてね、くらいですね。それがアルゼンチン、エルサルバドル、グアテマラ、コスタリカ、ニカラグア、ボリビア、ホンジュラス、メキシコです。全部が日本よりも危険ですから気を付けてね、くらいなのでしょう。「渡航の是非を検討してください」がパラグアイ、ベネズエラですね。パラグアイ、ベネズエラは南米で、ほかにも危ないのがやはり南米で「渡航の延期をお勧めします」が今出てきたコロンビアとかエクアドルなのですね。ですからやはり日本人の感覚では、日本よりはるかに危険な地域です。全部の地域ではないのですけれども、ここのエリアは危ないですよというところが 1 か所でもある国ですね。とりあえず戦争とかは起きていませんので退避勧告はありません。

ペルー

エクアドルの南がペルーです。ペルーもスペイン語の発音だとペルー (ルが強い) になります。こちらも現在の状況は「渡航の延期をお勧めします」という、危険度合いが下から 2 番目となっています。フジモリ元大統領の影響でラテンアメリカの中では日本人になじみのある国ではないかなあと思います。最近 CM などで人気のラクダみたいなアルパカという動物は、もともとペルー、ボリビア、チリの高原で放牧されている動物なのですね。マチュピチュなどの世界遺産も有名です。人種構成はメスティーソが 45%、インディオが 37%、白人はないですね、インディオが 37%です。ちなみにフジモリ元大統領などのアジア系は約 3%しかいないのですね。だから彼が大統領になったことがいかにすごいことかということが分かります。識字率は 87.7%です。文学的にはガルシア=マルケスと共に魔術的リアリズムを代表する作家マリオ・バルガス=リョサ (Mario Vargas Llosa) がいます。

ちなみにリョサというのは 1990 年に大統領選でフジモリ氏と戦って敗れました。現在ペルーは、地域によってはテロが発生し、危険な所もあります。

ボリビア、パラグアイ

次がペルーの南東になるボリビアです。人種構成は先住民が多くて大体 55%、その中でも先住民のケチュア族が 30%、マイアラ族が 25%、と細かく書いてありました。メスティーソが 30%です。識字率は 80.7%、インディオが多数派の国ということは分かっていただけかなあとと思います。ラテンアメリカの中では最も開発が遅れているとされています。ですから、もうこのボリビアとかになると本当に文学でもだれと思いつかない、有名な大人の作家でも思いつかないですね。

それは次のパラグアイもそうなのですから、ボリビアの南東にあります。人種構成は 95%がメスティーソ、識字率は 94%。私はほとんど未知のエリアなのでですね。

ウルグアイ

パラグアイと名前の似ているウルグアイというのは、似ているのですけれども大分違います。これはブラジルの南、アルゼンチンの東にあります。パラグアイとは国が微妙にくっついていないのですね。人種構成は、ここは白人が 88%、さっきまでは、ずっとメスティーソとかインディオとかでしたけれども、ここは白人が 88%、メスティーソが 8%、識字率が 98%。ですから人種構成だけでもパラグアイとウルグアイは国の特徴が違います。国内総生産（GDP）もウルグアイがパラグアイの 2 倍あります。ですからどれだけ貧富の差というか経済的な豊かさも違うかということが分かっていたかなあとと思います。

ウルグアイというと、まず子どもの本の作家で思い付くのが、オラシオ・キローガ（Horacio Quiroga）です。この人は絶対紹介しなければいけない人ですね。随分昔の人です。1918 年に発表した『フラミンゴの長くつ下』（オラシオ・キローガ作、やまかわはな訳、金の星社、1993 年）、これが話の一部なのですから、1918 年に「ジャングルのお話」という子ども向けの話を発表しまして、この話は今でもずっと読み継がれています。ジャングルつながりで、ジョゼフ・ラドヤード・キップリングの『ジャングル・ブック』と比較されることも多いのですけれども、内容としては同じくキップリングの『ぞうのはなぜ長い』とか、ああいう話に近いものです。今回皆さんに見ていただいている『フラミンゴの長くつ下』は、原作はもともと 8 点の短編集だったので、日本ではこの『フラミンゴの長くつ下』という本の中に 3 点選んで入っています。これはフラミンゴの脚はどうして今の色になったのか、といういわゆる、由縁譚です。ほかには漁師とシカが仲良くなる話とかワニが軍艦と戦って追い払うみたいな面白い話があります。このキローガは自然を大変愛していて、すでにこのころからいろいろ環境問題を考えていて物語にもうまく取り入れていたのですね。ですからこの本などは今読んでも古さは全く感じませんし、全 8 編まとめたものを今出しても価値があるのではないかと思います。この『フラミ

『ゴの長くつ下』が金の星社から出たのですが、現在は版元品切れ又は絶版なのですね。やはり文化的になじみがないからかなあと残念です。ただ、これだけ環境問題に対しての意識が高まっている中で、この時代からすごく先進的なことを考えて作品できちんと書いているので、今だからこそ逆に日本の子どもに紹介できるということもあるかもしれないなあと考えていました。

アルゼンチン

ウルグアイの西側がアルゼンチンですね。こちらになると皆さんだんだんまた聞き覚えがあるという所に戻ってきたかなあという感じになりますけれども、こちらも人種構成は白人が多くて85%、残りの15%はメスティーソ又はインディオです。ほかの国もそうなのですが、ただ「白人」といっても先住民の血が流れている場合は多いです。だからメスティーソと言うか白人と言うかというのは本当に本人次第ということもあるのです。こちらのアバウトさがラテンアメリカの魅力なのかもしれませんけれども。ですから何%白人で、何%インディオというかというよりも見た目とか肌の色で判断する傾向があったりして、先住民の血が流れていても見た目がまるっきり白人っぽければ白人であったりして、それは逆にその遺伝子のイタズラで先住民の血がより多く見えれば先住民っぽいと言われてしまうという本当に見かけの問題であったりします。これがアメリカ合衆国と大分違うところなのかなあと思っています。

アルゼンチンにはやはりいろいろ作家がいます、例えば、ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges) とかフリオ・コルタサル (Julio Cortazar) とかマヌエル・プイグ (Manuel Puig) とか世界的に有名な作家がたくさんいて、最近日本で人気が高い政治家で作家でもあった、エルネスト・チェ・ゲバラ (Ernesto Guevara) もキューバ革命とかで活躍した人なのですけれども、彼もアルゼンチン人です。子どもの本の数もほかのラテンアメリカ諸国よりあると思います。

野間のコンクールでも13回、2000年のグランプリ受賞者がアルゼンチンのクラウディア・レニャッツィ (Claudia Legnazzi) さんでした。このグランプリ受賞作がメキシコの出版社から出ています。今見ていただいている「わたしの家」という作品です。いかがでしょうか。線はすごく細いのですが、構図が大胆で色合いもおしゃれで私は彼女の絵はとても素敵だなと思っています。ただ、この本に関してはストーリーが余りにも漠然としているというかほとんどない感じなのですね。文章が作品の始めと終わりにちょこっとあって中は全部絵なのです。今からめくっていただいでゆっくりいきましょうか。まず、始めと終わりにしか文がないので全部の訳を読んでしまいましたが、2ページ目に「私は家を持っている。その家は行ったり来たりできて乗り降りできて小さくなったり大きくなったりしてこっちにもあっちにもあるの」ということが書いてあります。それからいろいろなシチュエーションで家が出てくるのですが、船の上に乗っていたり、象の上に乗っていたりとか、ちょっと見えにくいかもしれませんが本当に奇想天外な場所にあるのです。

車の上ですね、これは。これが象の上ですね。はい、これが戦車ですかね。本当にこちら
辺はずっと文章がないのですね。このカメのところにありますね。木の上において、山のてっ
ぺん、今度は雲の上ですね。どこでしょうここは、タンポポの中、このように次から次へ
と絵が延々と続いています。こんな街中にあったりして、お花畑の中ですか、森の中です
か、やっとこれで最後のページになりました。最後のページに来ると「そう、私のいると
ころに、いつだって私の家があるの」で終わります。すごく哲学的で芸術的で、素敵な
のですが、斬新といえば斬新なので、これを日本の出版社にじゃあ私が持って行こうかなと
いうとちょっと難しいかな、日本の読者、子どもの読者に勧められるかなとちょっと躊躇し
てしまうところがあります。恐らく出せるとしても大人向けの絵本という形になるのでは
ないかなあという気がします。ですから彼女の絵はとても素敵なので、もうちょっとスト
ーリー性のある絵本を出してくれたら是非持ち込みたいなあなんて考えています。

じゃあ逆にどういふ本が邦訳されるかという例を実際に紹介していきますと、同じくア
ルゼンチンの作家ケセルマン (Gabriela Keselman) による、『ねむれないの、ほんとだよ』
(ガブリエラ・ケセルマン文、ノエミ・ビリヤムーサ絵、角野栄子訳、岩波書店、2007年)
という作品ですね。これは、アルゼンチン出身のケセルマンという作家なのですが、
絵を付けているのはスペインのイラストレーターです。落ち着いた感じの絵で安心感があ
りますね。ストーリーとしては怖くてなかなか寝付けない男の子がいろいろなものを身に
着けたりするので、やはり眠れないのですね。最後にお母さんが、じゃあずっと
そばにいるわと言って、ずっと着けていたものを取ってしまってお母さんがそばにいたら、
安心してあつという間に寝てしまったという話です。何よりこの年ごろの子どもの目線に
立っているのがとても素敵だなあと思いました。お母さんの愛情でハッピーエンドになっ
て普遍的な話ですから日本の子どもも共感できるのではないかなあと思います。

このように海外の本を邦訳出版するかどうかという場合、私だったら例えば出版社に頼
まれて見てみたりとか自分で探してみたりするときに、これはよいですよと勧めるとき
の判断なのですが、もちろん日本ではない外国のものを入れるわけですから、外国ら
しさはもちろん必要なのですが、プラス日本人になじみやすさというものもないと全く異
質のものが来たら拒絶反応が出てしまいますので、そのバランスが大切なのです。日本
にはないものだから輸入はしたいのだけれども、だけど日本人が受け付けられないもの
では困るのですね。

例えば絵本ではないのですが、英米の作品でニューベリー賞とかカーネギー賞と
いった権威のある賞を取っている作品でも、歴史物は翻訳されにくいとされています。
それは背景になじみがないからということなのですが、例えば出すとしても、すご
く有名なものに限られてしまったりとか、結構冒険しないと出せなかったりとか、日本の子
どもにはフランスのナポレオンは有名でもイギリスのウェリントンほとんど知られていな
いので、ナポレオンのものは比較的出しやすいのですが、ウェリントンのものは、
作品はよくてもそれだけでハードルが高くなってしまったりします。日本人にとって英米

でもそうなのですから、ラテンアメリカは文化的により遠いので、それだけハンディがあるとも言えるのですね。もちろん英米のもの、欧米のものはすでにたくさん紹介してあるので、新しいものが欲しいという考えも一方ではあるのです。ただもう一つ、欧米のものであってもラテンアメリカのものであっても日本人が要求する水準に達していないといけません。日本人は、日本のものもたくさん出ていますし、英米の名作もどっさり輸入していますから、そういう意味ではすごく目が肥えているのですね。そういう経済の基盤がずっと安定していて、子どもの本の歴史も長い日本や欧米と比べると、ラテンアメリカの本で、じゃあこれはよいよと言える作品は少ないのが現状です。この図書館の中でもラテンアメリカの絵本というのは多数所蔵されているのですけれども、日本人からすると、これ、パンフレットですか、というような、学年誌の付録よりも素朴な作りの絵本が少なくないのですね。私なんかネットの書店で画像だけ見て買って、届いた物を見ると、え、これで、いくら、というようなものというのもあってびっくりということも実は少なくありません。でも逆にインターネットが発達したおかげで、ラテンアメリカの本もとても入手しやすくなり、創作する側もチャンスが広がったと言えるので、これからは大いに期待したいところです。

チリ

ラテンアメリカの最後の国になりました。チリです。アルゼンチンの西側にある、細長い国ですね。人種構成は 95.4%が白人及び白人系メスティーソ。白人系メスティーソ、新しい言葉ですが、何かというとメスティーソの中でもより白い方の人ということですね。この 95.4%の中で白人の割合が高いメスティーソが大体その中で 65%くらいだそうです。識字率は 96.4%です。

文学では詩人のガブリエラ・ミストラル (Gabriela Mistral) とパブロ・ネルーダ (Pablo Neruda) という人、二人がノーベル文学賞を受賞しています。ラテンアメリカの中では、一国で二人も受賞しているというのはチリだけです。小説では、映画にもなった『精霊たちの家』(イサベル・アジェンデ著、木村栄一訳、国書刊行会、1989年) (映画のタイトルは「愛と精霊の家」) のイサベル・アジェンデ (Isabel Allende) とかホセ・ドノソ (Jose Donoso) とか、ルイス・セプルベダ (Luis Sepulveda) がいます。ルイス・セプルベダの作品では、白水社から出ている『カモメに飛ぶことを教えた猫』(ルイス・セプルベダ著、河野万里子訳、白水社、1998年) がありまして、ストーリーはそのままです。カモメに猫が飛ぶことを教える本なのですけれども、すごく素敵なよいお話で、ヤングアダルトくらいから読めると思います。私もブックガイドとかで取り上げたことがあります。

チリは 1990 年ごろまで独裁政権下にありましたので、表現の自由もままなりません。『ペドロの作文』(アントニオ・スカルメタ文、アルフォンソ・ルアーノ絵、宇野和美訳、アリス館、2004年) という作品は邦訳が出ていまして、訳者後書きによりますと、最初はフランスの新聞に掲載されたそうです。書いたのが 1970 年で、チリでは発表できな

った。絵本の形になったのが 2000 年でベネズエラの出版社から出版されました。ということで、チリについての話なのですが、最初がフランスで、それからいろいろ広がって、最後はベネズエラという、チリはどこに行っちゃったのだという感じですね。ストーリーは軍の大尉が学校にやって来て家で夜の過ごし方を作文にするように指示をするのですね。ねらいは独裁に反対する者を捕まえることなのですね。ペドロの両親は独裁に反対しているので、もし彼が正直に書けば、捕まってしまうかもしれません。ということで、ペドロは何をどう書こうか悩んで、あるアイデアを思いつく、という話なのですね。日本にはなじみのない国の、なじみのない政治状況についての作品なのですがけれども、とてもよい作品なので、よく訳して出してくれたなあ后感心しています。

ラテンアメリカにとっての日本

ところで、日本にとってラテンアメリカは遠いですよ、遠いですよとさんざん言ってきたのですが、逆にラテンアメリカにとっても日本は遠い見知らぬ国と言えるように思います。国際子ども図書館の購入リストを作ったときに、逆に日本の作品でスペイン語に翻訳されているものも探しましたが、余り見付けられませんでした。リストに入れることができたのが、メキシコで出版された『ぼくネコになる』(きたむらさとし作、小峰書店、2003 年) とか『スーホの白い馬』(大塚勇三再話、赤羽末吉絵、福音館書店、1967 年) とか、ベネズエラで出版された『かぞえてみよう』(安野光雅作・絵、講談社、1975 年) とか『したきりすずめ』(石井桃子再話、赤羽末吉画、福音館書店、1982 年)、あとコロンビアで出版された『くりすます』(わきたあきこぶん、すずきえつろうえ、女子パウロ会、1971 年)、これは何かキリスト教系の本ですね。見付けてリストに入れることはできたのですが、どれくらいなじみがあって、読まれているかというのは私にはよく分かりません。そんなにメジャーではないのではないかなあとは推測します。

逆にラテンアメリカでも欧米の名作とか人気作はよく翻訳されています。例えば、最近の大ヒット作のハリー・ポッターシリーズとか、名作でずっと読みつがれているナルニア国シリーズとか、ロアルド・ダールの作品なんかはいろいろなところで見付けることができます。逆に本屋とかでそういう本の方があつたりするのですね。

アメリカ合衆国のヒスパニック

ラテンアメリカの国を今までで一通り紹介しましたので、ドミニカのところで少し触れた、アメリカ合衆国のヒスパニックについて最後にお話ししたいと思います。ヒスパニックとは何かというと、スペイン語を母国語とするラテンアメリカ出身の人々です。ですから今までメキシコからチリまでの人たちを言いましたけれども、この人たちの、ここから移民してアメリカに移民した人及びその子孫ですね。ヒスパニック人口全体の中で、一番多いのがメキシコ系で 66.1%、次いでプエルトリコの 9%、続いてキューバの 4%、圧倒的にメキシコ系が多いです。これだけ国境が接していますから、それは想像に難くないとは

思います。面白いことにそれぞれの民族集団は特定の地域に集中する傾向があるのですね。メキシコ系はメキシコと国境が隣接しているカリフォルニア州、テキサス州、ニューメキシコ州、アリゾナ州辺りが多いです。私がいたオレゴンには、カリフォルニアから入って北上して来た人たちが多くいました。プエルトリコはカリブ海にありますから、プエルトリコ系は、飛行機で飛んで来てニューヨーク市、マンハッタン近郊に住むことが多いです。キューバ系は、キューバから一番近いフロリダ、特にマイアミに多く住んでいます。逆にじゃあ内陸部はどうかというと、アメリカの五大湖の左側、シカゴ辺りで西から内陸に向かってきたメキシコ系とか東から内陸に向かってきたプエルトリコ系が大体合流するとされています。

シカゴ出身のメキシコ系のサンドラ・シスネロス (Sandra Cisneros) という作家は、1989年に『マンゴー通り、ときどきさよなら』(サンドラ・シスネロス著、くぼたのぞみ訳、晶文社、1996年) というシカゴのヒスパニック居住区を題材にした物語を出しています。この本はもともと一般向けに書かれたのですが、ヤングアダルト向けとしてもよく読まれていて、アメリカのヤングアダルト向けのブックリスト等にも載っています。そして、子どもの本の世界でメキシコ系の作家が活躍するようになったのは、先ほどちょっと言いましたけれども 90年代になってからです。カリフォルニア出身のギャリー・ソトの『四月の野球』が1990年、ヴィクター・マルティネス (Victor Martinez) の『オープンの中のオウム』(ヴィクター・マルティネス作、さくまゆみこ訳、講談社、1998年) が1996年、フランシスコ・ヒメネス (Francisco Jimenez) の『この道のむこうに』(フランシスコ・ヒメネス作、千葉茂樹訳、小峰書店、2003年) という作品が1997年、テキサス出身のデイヴィッド・ライス (David Rice) の『国境まで10マイル』(デイヴィッド・ライス作、ゆうきよしこ訳、福音館書店、2009年) というのが2001年ですね。こんな感じで主な作品が出ています。

まず『四月の野球』と『オープンの中のオウム』というのは現代の子どもの姿を書いています。『オープンの中のオウム』はどちらかというとマイノリティとしての差別とか苦勞を力強く訴えかけている感じなのです。それまでもそういうような彼らの不条理を訴えるような作品というのはあったのですが、とても洗練されて技術的に上手だということで、『オープンの中のオウム』は評価されてメキシコ系で初めて全米図書賞を児童書部門で受賞しました。一方で『四月の野球』というのは、ごく日常のだけれどが経験するようなこと、例えば、初恋を経験したりとか兄弟げんかをしたりとか、おじいちゃんちょっと散歩に出かけたりとか、そんなことが中心でメキシコ系という、何というか民族的、文化的特徴はあくまでも背景として、時々差別とか、貧富の差などが見え隠れするくらいに収めています。このソトとマルティネスも移民の子孫ですので、メキシコ系なのですが彼らは生粋のアメリカ人ということになります。逆に『この道のむこうに』のヒメネスというのは、4歳のときにメキシコから移民してきた人なのです。メキシコから移民してきた家族の話ですし、季節労働者としての苦勞とか移民局に捕まりそうになったりする

とかいうような自伝的小説です。これもアメリカでは高く評価されました。テキサスが舞台になっているライスの短編集『国境まで 10 マイル』はカリフォルニアのメキシコ系作家、ソトとかマルティネスよりもどちらかといえばもうちょっとメキシコ色が強いというか、それだけメキシコと近いような印象を持ちます。メキシコの国境も近いですし、メキシコから家政婦が定期的にやって来るお話もありますし、実際にメキシコに行くお話もあつたりします。ソトの『四月の野球』でも『国境まで 10 マイル』でも両方ともおじいさんと子どもの話があるのですけれども、ソトのおじいさんはおそらく移民なのだろうなという感じなのです。ライスの方のおじいさんはテキサスにいたのですけれども、国境の方が勝手に変わってしまった、先住民タイプのメキシコ系なのではないかなという印象があります。

おわりに

ここまでドミニカ系はアルバレスを紹介して、プエルトリコ系も紹介して、メキシコ系のヒスパニック作家も数名挙げてきました。基本的にこういう作家たちの創作言語は、英語です。ただ自分たちのアイデンティティを表現する手段として文章中の英語の中、例えばセリフとかキーワードとかにスペイン語をちょこっと入れたりします。ソトなんかは御丁寧に巻末にスペイン語用語集とか付けてくれるのです。どの作品でも大体彼の場合は付いています。ですからそういう形でスペイン語とかかわりを持って、メキシコ系、ドミニカ系、ヒスパニックのアイデンティティを保持しているのではないかなあというふうに思います。絵本などではスペイン語と英語のバイリンガル絵本というのがとても多いのです。ヒスパニックの人口というのはこれからも増え続けると予測されていますし、ヒスパニック作家や作家の需要もこれまで以上に増え、大きくなるのではないかなあとは予測しています。またスペイン語そのものの作品の需要も高まるのではないかなあと考えています。というのは現時点でアメリカのアマゾンとかのインターネット書店では、スパニッシュというカテゴリがあつて、それがすごく増えていて、いろいろ調べていくと、予想以上にラテンアメリカの作家の作品が出てくるのです。それは書誌情報も詳しくあつたり画像もあつたりして、国際子ども図書館の仕事では大変助かったのです。そういうことで、前よりもすごく増えたなということを感じているので、やはりこれからはもっと増えていくのではないかなと思います。それはまあつまりラテンアメリカの作家のチャンスが拡大してどんどんよい作家が生まれることにもつながってほしいなと願っています。ということで今日のお話は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。